科学ジャーナリスト塾の記録から

柴田鉄治さんを偲ぶ

柴田さんは科学ジャーナリスト塾で毎年熱心に講演をされました。このページでは、その講演を聞いた第14期、15期の塾生の感想文を再掲し、当時塾長をつとめていた佐藤年緒さんから柴田さんの活動がどう見えていたのかを紹介いたします。

第17期塾の修了式での記念写真。前列中央が柴田さん。

塾で柴田さんは、いつも熱く語る。講義だけでなく、開講や修了の日など節目には必ず顔を出し、塾を見守ってくれた。

お祝い懇親会の乾杯の音頭をとった（2019年2月14日）

第15期の修了式であいさつする柴田さん（2017年2月15日）

左の写真は第17期の室山塾長（当時）と塾生を交えて雑談をしている柴田さん（2018年2月15日17）、右の写真は（右奥）遠くからも見守る柴田さん（同年11月11日）

■第14期塾（2015年10月～2016年3月）

40年ぶりに同行した南極観測船上で

12月2日（水）、柴田さんは、南極観測隊に同行取材して学んだこと ―「国家とは何か」「科学の国際協力とは何か」と題する話をした。この講義を聞いた塾生（当時）が以下の記事を書き、塾長（同）が柴田さんと南極との関わりについて紹介した。

■科学ジャーナリストが「南極で見たもの」　石川航平

12月2日の科学ジャーナリスト塾の第4回講義では、科学ジャーナリストの柴田鉄治さんによる南極取材の経験談をうかがった。朝日新聞社の科学記者として2度南極観測隊に同行、南極に魅了されて退職後も3回訪れたという。「長年の積雪によって極点の標高は2800メートルにもなる」など、南極の自然や観測の歴史、取材の話をスライドで説明。塾生も初めて聞く世界に驚いた様子だった。

柴田さんは、国境もなく国を超えて協力し進める南極観測の取材体験から、「国家とは何かを考えざるをえなかった。地球から貧困や紛争、また戦争が生まれることは、あくまで人間が引き起こした人間自身の問題ではないか？」と深い問いを投げ掛けた。

塾生は熱心に耳を傾け、次々と質問が続いた。ジャンルは国際政治、スポーツや気象など多岐に渡った。印象に残ったのは「ジャーナリズムとして発信する上で事実をどう捉えるべきか？」という質問だった。それに対して柴田さんは記者としての心構えをこう語った。

「取材した事実は書けるものの、国境のない世界が理想の世界だ、といった主張を新聞社に在籍している時は書けなかった。フリーになってからの講演会では何十回と話し続けることで、きっと次の世代が私の意思を受け継いでくれるはずです」

このほか塾生から「南極に原発があったという事実に衝撃を受けた。環境や国際政治の問題など、社会のテーマに関心が広がった」という感想も聞かれた。

柴田さんはこう締めくくった。「南極はいかに素晴らしいか、その思いを伝えたかった。いっそのこと国境をなくして“地球国家”という一つの国にすれば良い。『南極は地球の憲法九条だ』ということです」

最後に柴田さんが作詞をした「南極賛歌」に作曲家の池辺晋一郎氏が曲を付けた混声四部合唱曲『地球の九条もしくは南極賛歌』が合唱団によって歌われている映像が紹介された。

■南極と柴田鉄治さん　佐藤年緒

「中学生のころから科学者になるのが夢だった」という柴田鉄治さん。湯川秀樹博士のノーベル賞受賞のニュースに感動し、自然界の道理を解き明かす仕事に憧れを抱いたという。大学では地球物理学を専攻。壮大な宇宙の謎、そのなかの惑星の一つ、地球の謎に挑んでみようと考えた。柴田さんがなぜ、いまも南極を伝え続けているのだろうか。

▽戦争体験も重なって

柴田さんが大学生だった1956年に、日本の南極観測が始まった。第１次観測隊が帰国した直後の大学の「五月祭」に、「南極観測の展示をやろう」と展示物集めに走り回った。朝日新聞社に写真を借りに行ったのも、その時が初めてだった。

科学者への夢を捨てて新聞記者になったきっかけは、大学にあるジャーナリズムの研究機関の「新聞研究所」の教育部が公募した学生活動に参加したことだ。新聞社のＯＢたちの語るエピソードは痛快だった。あの戦争を止められなかったのは戦前の新聞がジャーナリズム精神を失い、「死んでしまったからだ」という真面目な話は、子どものころの学童疎開や東京大空襲の体験などから「二度と戦争はごめんだ」と思っていた柴田さんの心にしみた。

「ジャーナリズムの仕事も面白そうだなと思った。そのうえ新聞社が南極観測を提言し、実現させることもできるのか、という思いが背中を押してくれた」と振り返る。

記者になって３年目、札幌に勤務していたとき、無人の昭和基地で１年間、奇跡的に生きていたカラフト犬のタロ、ジロのうち、タロが札幌に帰ってきた。観測船「宗谷」も南極での役目を終え、巡視船として北海道に戻ってきた。オホーツク海での流氷調査に乗船して連載記事を書いた。

▽惚れ込んだ「理想の地」

そんな縁があって、東京の社会部に転勤した1965年、完成した新砕氷船「ふじ」で再開された南極観測（第７次観測隊）の同行記者に選ばれた。３０歳のときだった。

その取材で柴田さんは南極に心底から惚れ込んでしまった。人類にとって「理想の地」だとの思いは、それ以来ずっと抱き続けている。新聞記者生活も終わり、大学での客員教授の仕事も終わって、自由な時間ができたとき、「もう一度、南極へ行こう」と思い立った。そのときは７０歳。

帰国後、「南極の語り部」として南極の素晴らしさ、とくにその平和な姿を伝えようと「南極条約」（1961年発効）を紹介するなど、あちこちで講演活動を続けてきた。あるとき、講演を聴いた友人から「きょうの話を『詩』にできないか」という話が舞い込んできた。柴田さんがつくり上げた詩がこの『南極賛歌』だ。

１、南極は　地球の九条だ
　国境もない、軍事基地もない
　人類の　理想を実現　平和の地
２、 南極は　素敵な自然の楽園だ
　ペンギンがいる　アザラシがいる
　生き物が　共存共栄　豊かな地
３、南極は　宇宙に開く地球の窓だ
　オーロラがある　隕石がある
　なぞを解き　未来をさぐる　科学の地
４、南極は、地球環境のモニターだ
　氷を掘る　オゾンを測る
　力を合わせ　環境守る　モデルの地
５、南極は　地球の憲法九条だ
　戦争なくし　人類仲良く
　世界中を　平和に変える　魔法の地

▽合唱曲として、「南極授業」として

詩は友人を通じて作曲家池辺晋一郎氏に届けられ、ざっと７年が過ぎた2014年春、「実に実に遅くなりました」という手紙とともに池辺氏から混声四部合唱曲の楽譜が届いた。池辺氏は「音楽九条の会」の呼びかけ人でもあり、「世界平和アッピール七人委員会」の委員でもあった。合唱曲名は『地球の九条もしくは南極賛歌』とされたが、南極にも、憲法九条にも、「ほれ込んでいる」柴田氏は反対する理由はないという。

こうして2015年１月25日、調布市グリーンホールで開かれた「池辺晋一郎さんと平和を歌おう」という催しの中で、池辺氏指揮による調布合唱団の合唱が披露された。柴田さんは「それを聴いて私がどれほど感動したことか」と話す。

そしていま柴田さんは「南極の素晴らしさを子供たちに伝えたい」と次世代を担う子供たちの教育にも関心を向けている。全国の小・中・高校の教員を南極に派遣するプロジェクトをスタートして7年。ネットワークの連絡役を担い、今年の年賀状でも「南極授業を全国の学校に広げていくためにご支援を」と呼び掛けた。

■「アポロの月着陸」の講義から

2016年１月27日（水）、柴田さんは「アポロの月着陸を米国に取材して学んだこと ―『地球環境問題の大切さ』と『品質管理技術の大切さ』」を講義した。その内容を都丸亜希子さん（サポーター）が「有限である地球」を初めて実感させた映像―柴田鉄治さんが語ったアポロ報道」を、また元木香織さん（当時、塾生・大学院生）が「柴田さんが“抜かれた記事”にわくわく」の記事にする。塾長（当時、佐藤年緒）が柴田さんと塾生とのやりとりをまとめ、記事にしている。

■「有限である地球」を初めて実感させた映像
―柴田鉄治さんが語ったアポロ報道―

都丸亜希子

柴田鉄治さんの今回の話題は「アポロの月面着陸」。この時の報道が「科学の進歩が人類を幸せにするとは限らない」ことを世界中に認識させたという。残念ながら広島・長崎の原爆によってではなかった。なぜなら原子力でも「軍事利用が悪いのであって、科学技術が悪いのではない」というのが70年代までの一般大衆の思想だったからだという。

第二次大戦後、米ソはドイツの技術者を奪い合い、軍備拡張の一環として宇宙開発合戦を始めた。57年、ソ連が先に人工衛星を打ち上げ、スプートニクスショックを米国に与えた。対抗してケネディ米大統領は「60年代中に人間を月に到達させる」と宣言した。68年にアポロ8号が月から見た地球の姿を中継し、翌69年にはアポロ11号がついに月に着陸する。「宇宙に浮かぶ、かけがいのないオアシス」の地球を外から人類は見たのだ。

それまで先進国に個別には公害問題があったものの、その重大性に気が付いていなかった。アポロの運んだ映像によって、初めて「地球の有限性」や科学技術文明の問題に気づいた。69年はユネスコがアースデイ（地球の日）の概念を提起した年。72年には「かけがえのない地球」をキャッチフレーズとしたストックホルム会議が開催され、ローマクラブが「成長の限界」を発表するなど、この時期を境に地球環境問題が盛り上がっていく。

メディアはアポロ報道で地球環境問題に火をつけたと柴田さんは確信している。この時代を肌で感じた人だからこその洞察である。

■柴田さんが“抜かれた記事”にわくわく

元木香織

初めての月面着陸は1969年。そのころ私は生まれていなかった。しかし、いつどこでどのように知ったのか覚えていないが、月面着陸時の写真やアポロという名前、宇宙飛行士の名前を知っている。

1月27日の柴田講師の講義では、当時の取材の手法を切り口に、日本とアメリカの取り組み方の違いや、月面着陸成功の鍵を教えていただいた。また、地球がきれいな青色だったことが判明した途端に、地球上の人が環境問題を積極的に提起するようになった、という時代の流れの分析結果は面白かった。

とても印象に残ったのは、最後にお話された他の新聞社に“抜かれた記事”のこと。それはどこかで借りた宇宙服を着てみた体験を記事にした特ダネだった。その記者さんは、一足早くアツい情報をキャッチして企画したのだ。いま私が聞いても面白い！と思う。さまざまな切り口と斬新な企画でいくらでも面白い記事になるのだと分かり、書く仕事にわくわくした。

次の講義も楽しみである。しかしながら、私はこれから一ヶ月間の研究航海に出発する。塾を休むことになるが、目一杯、私の大好きな研究を楽しみたい。行ってきます！（1月31日、地球深部探査船「ちきゅう」でのインド沿岸調査航海出航を前に。筆者は横浜国大大学院環境情報学府修士課程1年）

■歴史的「事実」と時代への想像力
＝柴田鉄治さんの話を聞いて＝

佐藤年緒

1969年7月、アポロ11号の月面着陸を米国で取材報道した柴田鉄治さんの体験談を、世代が異なる塾生が聞く面白さがその日のテーマにあった。もう46年前の話なので、塾生の半分以上は生まれる以前の話、「歴史」の話である。塾生（元木さん）が書いているように、テレビの映像で見たことがある、学校で習ったことがあるというメディアを通じた情報や伝聞なのである。

宇宙に浮く地球の写真は、いまでは教科書だけでなく至る所で見る。それだけに「当たり前」の地球の姿だが、50年近く前にその姿を初めて見た際の当時の人々の感動を現代の人がどこまで想像できるのか―そんなことを問う話題提供でもあった。

「地球が丸いことが証明できるのか？」という科学史上の論争も、アポロからの写真を見れば忘れてしまいそうな、映像にはそんな怖さもある。「本当は月面に着陸なんかしていない。テレビの映像のトリックだ」と「陰謀説」を取り上げたテレビ番組が米国と日本で放送されたこともあって、それを信じた若者がいることを柴田さんは大変気にしていた。歴史的な事実を当時の時代状況とともに想像する力が試されるのだろう。サポーターの都丸さんの記事も時代の背景を意識している。

それにしても、月面に初めて降り立ったアームストロング船長が発したとされる「一人の人間にとって小さな一歩だが、人類にとっては偉大な飛躍だ」という第一声は、米国の取材現場には伝わってこなかったと柴田さんは言う。東京の本社が米国の通信社を通じて得た情報だったとのこと。あらかじめ月に降り立った際に使う予定稿が通信社に渡されていたのではないか、本当に月面で発したのかと柴田さんは疑っているところが面白い。

私ごとだが、アポロ月面着陸の1969年の夏、私は浪人生だった。予備校のあったお茶の水界隈は大学が封鎖中で、学生による路上での投石が繰り返されていた。当時の私には月面着陸のニュースは何かよそ事のように響いた。アポロ打ち上げ寸前にケネディ宇宙基地に集まった黒人たちのデモ隊が「宇宙より地上の飢えを！」と叫んでいた動きを目撃し、特ダネにしたという柴田さん。当時、その社会面記事を読んでいたら、あすへの不安を拭えぬ私も共感しただろうが、残念ながら読み落としていた。

■第15期塾（2016年9月～2017年2月）

柴田さんの案内で、2016年9月22日（祝日）に南極観測船「しらせ」の見学会を行った。以下は、参加した塾生の報告記事である。（見学会後、係留されている「しらせ」の前で記念写真。人物の部分をアップした2枚の組写真。前列中央が柴田さん）

船内で解説する柴田さん

■しらせ訪問から学んだこと

七海裕貴

2016年９月22日、千葉県船橋港にて柴田鉄治さん案内で南極探査船「しらせ」の見学会に参加した。あいにくの雨だったが、思ったよりも親子連れが多く会場を賑やかにしていた。また古めかしい迷路のような船内には、写真・ポスター・南極の石など様々な展示物があり、小さな博物館のようになっていた。船体や防寒着の色などオレンジが目立つ。それは「単純に見やすいから」とのことだった。当時の乗員の生活を少しでも感じたいと思っていたところ、寝室の限られた個人スペースに張られたシールや、散髪部屋の入り口にある手作りのユーモアがあるチラシにそれらを感じた。

見学会終盤、ミサワホーム井熊英治さんから南極クラスを受けた。話に引き込まれるようなプレゼンや南極の氷に触る機会があり南極を身近に感じることができた。南極クラスは年間300回ほど全国の学校で開催しているとのことだ。この授業を受けて「南極に行ってみたい」と思った子供たちの幾人かが、将来南極に挑戦していくのだろうと思い、感慨深く感じた。質疑応答で、南極に基地を作ることで得られる技術は「シンプルに簡単に高性能なものが作れること」との話があり、ものづくりの人間側として共感できた。

しらせへの訪問や柴田さんの体験談を聞くまで、南極へ特に関心がなかった。なんとなく南極には何もないと思っていたからだ。しかし南極には、独自の生態系、地球と宇宙の歴史、地球環境、そして南極を平和的利用のみに限定する南極条約など貴重なものがあった。今回の学びを個人的に広めていきたいと思う。

写真は隊員たちが互いに髪を刈る理髪店のチラシ。部屋にはトラ刈りになった隊員の写真があった(撮影:七海裕貴)

■南極では息が白くない？！
－昭和基地での秘話を聞く－

藤田豊

9月22日に、科学ジャーナリスト塾の番外編として、塾アドバイザー柴田鉄治氏の案内で、南極観測船「しらせ」（初代）の見学会が催され、塾生の多くが参集した。南極での越冬を4回も体験をされたミサワホームの井熊英治氏の「南極クラス」に参加し、南極の話を伺った。我々の集合時間が遅かったため、井熊氏の「南極クラス」は既に終了していたのだが、柴田氏と井熊氏が同時期に「しらせ」に乗船していたというご縁があり、井熊氏が我々塾生のために特別に時間外クラスを開いてくださった。

話の中で「南極では、吐いた息が白くならない」という事実を初めて知り、不思議だった。「南極の空気は綺麗なので、呼気中の水蒸気が液化・凝固するのに必要な微細なゴミ粒子が存在せず、水蒸気が気体状態で拡散する」との解説に、なるほどそうなのかと合点した。

また、プレハブ住宅は南極基地の建物開発から生まれた、という話は聞いたことがあったが、ミサワホーム社員である井熊氏の話からその経緯を知る事ができた。昭和基地ではそれぞれの分野の専門家は1～2名しかおらず、何をするにも観測系・設営系を問わず隊員が助け合う以外にない。そのため、ミサワホームでは昭和基地の建物を設計するに当たり、誰でも簡単に素早く組み立てられることを基本にしたのだという。その構造が後のプレハブ住宅に繋がったという説明を聞き、プレハブ住宅誕生秘話を知った。

写真は「南極クラス」内の展示品（撮影：藤田豊）